

変わる国際音楽コンクール―競争から共創へ 神保夏子



2007年開催の第13回チャイコフスキーコンクール。©ZUMA Press, Inc. / Alamy Stock Photo

「コンクールとは馬のためのもので、芸術家のためのものではない」と述べたのは、かのペーラ・バルトック(1881-1945)であった。「競技」としての芸術音楽の在り方や、その審査の公正性に疑義を呈する音楽家や愛好家は、今も昔も少なくない。にもかかわらず、コンクールは今日に至るまで多くの人々をひきつけ、西洋芸術音楽文化の重要な一部を占めてきた。

コンクール伝説

著名な国際音楽コンクールには、伝説や逸話の類がつきものである。たとえば、第1回チャイコフスキーコンクール(1958年)の覇者となった米国のピアニスト、ヴァンクライバーン(1934-2013)。ソ連が国威をかけて創設したこのコンクールで、ほぼ無名のアメリカ青年(当時の米ソの宇宙開発競争に擬えて「アメリカンスポーツニク」と呼



ヴァンクライバーン。「快挙」を称えるアイゼンハワー大統領とともに。OTPG Images / PPS通信社

ばれた)が優勝をきった衝撃は、冷戦下の米ソ両国を震撼させた。あるいは、1980年のショパンコンクールでのイーヴォ・ポゴレリチ(1958-)。慣習的なショパン演奏のイメージを逸脱した大胆な解釈ゆえに本選進出を逃したが、その因縁けた才能を認めた審査員のマルタ・アルゲリッチ(1941-)が審査結果を不服として辞任。はからずも「落選」ゆえに有名になったポゴレリチの存在は、コンクールの審査方式が独創的なアーティストの前では必ずしも万能ではないことを印象付けもした。



ポゴレリチのショパンコンクールでのライブ演奏LPのジャケット写真。聴衆の熱狂ぶりを物語っている。

音楽コンクールには、ときに「音楽」の領域を超え得るドラマがある。良くも悪くも。

初期の国際音楽コンクール

近代的な最初の国際音楽コンクールの誕生は、19世紀末のロシアに遡る。フェルッチョ・ブゾーニ(1866-1924)やヴェルヘルム・バックハウス(1884-1969)、さらにはバルトック(バックハウスに敗れ、ピアノ部門の第2位になった)をも輩出したこのアントン・ルビンシテイン・コンクールは、1910年に早くも終焉を迎える。しかしその後の両大戦間期に、今日まで続くいくつかの先駆的な国際音楽コンクールがヨーロッパの各地で設立された。



若手音楽家の育成、国際的な活動の支援を目的としたロンティボー・コンクール創設者の一人マルグリット・ロン。©Kag-images / A70

なかでも最も長い歴史を持つのが、1927年設立のショパン・コンクールである。創立者のイェジー・ジュラレフ(1886-1980)は、第一次世界大戦直後の混乱のなかでスポーツに興じる若者たちの熱狂から着想を得て、ピアノコンクールの設立を思い立ったという。ジュラレフの主な狙いは、若者たちの競争心をいざ利用して、ショパンの音楽とその正統な演奏を広めることにあった。

もちろん、若手音楽家の支援自体を目的として立ち上げられたコンクールも多い。フランスのロンティボー・コンクール(現ロンティボー・クレスパン・コンクール)は、第二次世界大戦で演奏活動を阻まれた若者たちを勇気づけようと、占領下のパリで1943年に設立された。創立者の一人でピアノ教育者のマルグリット・ロン(1874-1966)は、若いピアニストのキャリアにはスポーツにも似た競争的な側面があると指摘。コンクールやマスタークラスを通じて、若手演奏家の育成と国際的な活躍の手に助けを注いだ。

代理戦争としてのコンクール?

秀でた才能を持つ若い音楽家を「発

掘」し、さまざまな褒賞を通じて、未来の栄光への道を切り開くこと。程度の差こそあれ、多くの国際音楽コンクールがそうした目的を共有してきた。本質的には出場者個人のパフォーマンスが問題になるはずの国際音楽コンクールは、しかしながら、しばしば彼らの出身国同士の競争の舞台とも見られることとなった。

冷戦期に特に過熱することになる、このコンクール・ナショナリズムの先陣を切ったのはソ連だった。自国文化の優位を示す手段として、科学技術やスポーツとともに芸術をも利用しようとした同国は、優れた音楽家の選抜・育成に国家レベルで力を注ぎ、彼らを名のある国際音楽コンクールに派遣した。第1回ショパンコンクール(1927年)でのレフ・オポリン(1907-74)の優勝を皮切りに、諸々の国際音楽コンクールでソ連勢が見せた圧倒的な強さは、他国の音楽界にとって大きな脅威となった(前述したクライバーンの優勝が衝撃的であったのも、こうしたソ連勢によるコンクール上位独占状態が長らく続いてきたからに他ならない)。

一方、国際音楽コンクールの運営者の間では、政治的な緊張関係が高まる時代であるからこそ、音楽を通じて平和的な国際協調を育むことが重要だと



創設間もないWFIMCの1958～59年シーズン版パンフレットには、加盟するコンクールとして「東側」の「プラハの春国際音楽コンクール」の名も挙がっている。

第1回ジュネーヴ国際音楽コンクールの募集要項。

いう見解も広がった。1957年にジュネーヴで設立された国際音楽コンクール世界連盟(WFIMC)の初期には、鉄のカーテンの両側からのメンバーが等しく含まれていた。

1966年に制定された同連盟の定款には、国際音楽コンクールにおける「真の国際性」の条件の一つとして、審査の「厳密な公正性」が掲げられていて、コンクールから政治的要素を完全に払拭することは難しい。しかし少なくともその理想に向けて、WFIMCは「国際的」で「公正」なコンクール運営にかかわるさまざまなルールを作り上げていくことになるのである。

コンクール入賞の「インフレ」

アルトウーロ・ベネデッティ・ロミケラ・ンジェリ(1920～1995)、ウラディミール・アシュケナージ(1937～)、マルタ・アルゲリッチ、マウリツィオ・ボリーニ(1942～)——戦後を代表する多くのピアニストたちは、重要な国際音楽コンクールでの優勝をきっかけに世界的な音楽家へと成長していった。国際音楽コンクールでの入賞が、そのままプロ時代としてのキャリアの成功を保証しえた時代が、確かにあった。しかしそれは、そうしたコンクール自

体がまだ比較的少数であった頃の話を。

第二次世界大戦後、華やかなスターたちの誕生に彩られながら、国際音楽コンクールの数は鱗立りに増えていった。まずはヨーロッパ、ついでソ連と南北アメリカ、最後にアジアへと、国際音楽コンクール設立の動きは着実に広がった。コンクールの増加に伴い、当然ながら入賞者の数も加速度的に増加し、一つの賞が持つ価値は相対的に下落した。今日、一つか二つのコンクールに入賞したからといって、音楽家としての未来がただちに切り開かれる保証はない。それでは、コンクール自体の価値もまた減ってしまったのだろうか？

国際音楽コンクールの現在

「音楽コンクールは21世紀においてさまざまな課題に直面しています」とWFIMC事務局長のベンジャミン・ウツドロフは語る。溢れかえる入賞者の活動の場をいかに切り開いていくか。それ以上に多くの落選者をどうフォローするか。さらには、聴衆や地域社会にとってコンクールをより魅力的なものにするにはどうすればいいか。そうした模索の中で近年顕著になっているのが、音楽コンクールの機能をめぐるヴィジョンの転換である。

ただ一人の優勝者をスターとして崇拜するかわりに、出場者一人一人の健闘を応援し、祝賀すること。入賞の有無にかかわらず、出場者と審査員や聴衆との出会いを、その教育的・関係構築的な価値を、コンクールの本質的な意義の一部と捉えるということ。理想論ではない。音楽コンクールというイベントのデザイン自体が、このように変化しつつあるのだ。

コンクール「観戦」は面白い。しかし、音楽コンクールの出場者たちは単なる競走馬ではない。今まさに成長しつつある、次世代の音楽文化の貴重な担い手なのだ。コンクールを通して、さらにはその後に、彼らの才能をいかに大きく羽ばたかせることができるか。コンクールの成否、そして未来の音楽文化の運命は、そこにかかっている。

じんぼう・なつこ

東京藝術大学音楽学部器楽科(ピアノ専攻)および楽理科を経て東京藝術大学大学院音楽研究科修士(音楽学)。現在、日本学術振興会特別研究員PD、立教大学ほか国立音楽大学、東京藝術大学で講師を務める。共訳書にカンタン・メイヤス『亡霊のジレンマ』(青土社)など。